

伝

■ 1995年1月17日

(阪神淡路大震災) : 午前
5時46分。23年前、誰
がこんな悲劇を予測できた

でしょうか。突然襲い掛かった地震は、あ
っという間に6434名の尊い命を奪って
しまいました。亡くなった方の多くは家屋
の下敷きになり燃え広がる火災による焼死
がほとんどでした。目の前で家族を失う、
これほど悲しいことはないでしょう。犠牲
になった中学生は145人、小学生130
人、赤ちゃんや幼児は、122人亡くなり
ました。■震災後、数日たった時の話です。
遺体が置かれたある体育館では、残された
家族で溢れかえってしていました。その中で女

の子が膝の前に置いた焼け焦げた鍋をじつと見つめています。泣くでもなく悲しむでもなく、ただ～じつと鍋を見続けています。世話をしている人が気になり声をかけます。鍋の中には小さな骨が入っていました。「どうしたの」と声をかけた瞬間、大粒の涙を流し、一生懸命に話し出します。その日は、お母さんに抱かれて1階の部屋で一緒に寝ていました。何が起きたのか分からないうちに家の下敷きになっていました。長い時間、身動きできずやっとの思いで脱出しますが、家の前は大騒ぎでした。どの家も倒れています。気が付くと火災が発生しており炎が近くまで迫ってきました。お母さんが家の中にいることを思い出だし、近くの大人たちに声をかけます。「お母さんを助けて、お願い助けて」繰り返し走り回っている大人たちにしがみつき助けを求めます。

声がかかるまで叫び続けますが誰にも聞こえません。■もう自分で助けるしかないと決断し、「お母さん」と叫びながら倒れた家具をどけ、瓦を投げ必死に探します。やっとお母さんの手を見つけましたが、姿が分かりません。手を必死に握りながら叫びます。自分の手は、もう血でどろどろになっていました。女の子は、ただ「お母さん、お母さん」と泣きながら叫ぶことしか出来ません。叫び続ける女の子にお母さんは、名前を呼び、かすかな声で言います。「ありがとうございます。もう、逃げなさい。」そう言ってお母さんは、女の子の手を離しました。女の子は仕方なく逃げます。家を離れた瞬間、お母さんを下敷きにした家は燃えてしまいました。燃えていく家を女の子は何時までも見続けていたそうです。焼け跡から何日もかけて、お母さんを見つけ出し鍋に

入っていたそうです。女の子は、事の有様を一生懸命に話してくれました。23年たった今、どうされているのでしょうか。犠牲になられた方たちは、どれほど無念なことだったか。私たちは、過去の教訓を学び未来に備えることが、とても大切だと思います。ルミナリエの灯火は、トミナリエも受け継いでいます。謹んでご冥福をお祈りいたします。 2018.1.17